

アクティブスチューデント応援奨学金活動報告書

国際経営学部一年 船石篤紀

今回私はカンボジアのプノンペン、シェムリアップでNPO活動の見学をし、フィリピンのセブ島で今後、私がNPOを設立するためのテーマ探しで研修に行ってきました。最初に入国したのはカンボジアのプノンペンでした。コロナウイルスの影響で香港経由だったところをマレーシアのクアラルンプール経由に急遽変更しました。飛行機に乗っているときには機内の中は加湿され、乗客はマスクを着用し対策していました。カンボジアに訪れた理由としては日本のNPO法人であるJMAS 日本地雷処理を支援する会の地雷処理活動を見学するためです。

私が訪れたカンボジアの都市、プノンペンにはすでに地雷はなく、多くの人たちで賑わっていました。プノンペンの一角にあるJMASの拠点に集合しそこから隊員の人たちと地雷処理の現場であるコンボンチャムへ向かいました。処理現場での撮影はできないので行くまでの道で撮った写真を添付しておきます。

2時間ほどで到着しました。近くに地雷はなく少し歩いて処理現場に向かいました。最初の現場は機械による地雷処理のエリアでディマイニングマシーンという大きな地雷処理機を安全なところまで移動させてこの処理機の説明を受けました。手作業での処理はまずそこに生える草木を取り除きその後探知機で捜索しスコップや棒などで掘り起こすので大型機械での処理は人間の手作業より20倍早いそうです。ディマイニングマシンは日本のKOMATSUがブルドーザーをベースに作製したもので、前輪の前についているブレードを地面に押し付けて爆発させて処理します。機械処理現場を見た後には人力による作業の見学でありその前に地雷や不発弾の模型を見ながら地雷がどのような仕組みなのかの説明を受けました。その後重い防護服を装着し、地雷が埋められた所へ行く準備をしました。かなり重いので炎天下の中これをつけて地雷処理に当たるなんてすごい人たちだと感じました。10分ほど歩くとロープが張ってあり“danger”という文字とドクロの看板が立ってありました。ロープの外から本物の地雷をこの目で見る事ができたと同時に体に緊張が走りました。(手作業での処理の見学はなし)

その後は地雷処理によって作物の栽培ができるようになった土地などを見学しました。地雷原がなくなることでそれまで使えなかった土地を建物や農作物の栽培などに利用できます。この日の見学は半日だけということだったのでJMASによって作られた学校(地雷処理によって利用可能になった土地の学校化)を訪れられなかったのは残念であるが目の前で対人地雷を見学し講習を受けるという貴重な体験ができたことは非常に良かった。

プノンペン発祥のJMASだがその運営方法を尋ねてみました。18年の活動実績を持つJMASはかつては不発弾、地雷処理に関わっていたが近年ではカンボジア地雷処理センターのカ

ンボジア人要員の地雷処理技術、不発弾処理技術のための教育にも力を入れています。カンボジア人員に処理方法を教育するという運営方法は将来日本人が関わらなくても自分たちで処理方法を継承していくという事を見据えての事業だと感じた。教育は運営する上でとても大事なポイントであるとの分野でも言えるのではないかと思いました。この運営方法がカンボジアの地雷がなくなる鍵になると信じている。カンボジアにおける JMAS の事業は、カンボジアの地雷処理を管理実行する府機関であり、人員は各国からの援助額の増減により変化していますが現在は約 1600 人とのこと。基本的な任務は除去活動、地雷汚染された地域の特定・表示、必要な教育訓練及び地雷被害回避のための活動であり、各国の NGO などとの連携も行っているそうです。今回実際に処理現地に赴き、その処理と土地の活用に向き合う隊員の熱意を感じることができたのは今後私が視野に入れていた NPO 設立に向けて“人を助けたい”という大きなモチベーションにつながりました。

またそれ以外に地域のインフラ整備にも関わっていて交通がグチャグチャであるカンボジアという国に地雷以外の面でも貢献している NPO 組織であると感じた。実際行って見て思ったがカンボジアの交通道路は最悪で整備されてるとは思えない、そこで日本の組織が協力的にサポートする点は見習うべき点であると思いました。私もトゥクトゥクという乗り物に乗ってホテルや集合場所へ向かいましたが交差点などはもうめちゃくちゃで信号なんか現地の人たちは気にしません。だから非常に危ないし渋滞も起こると感じた。実際にそんな中バイクとバイクが当たってこけるのを研修中に目にしました。幸い怪我はなくそのあとすぐ起き上がってどちらもどこかへ走って行きましたがこの短い期間の研修中に事故を目にするほど頻繁に事故が起こっているという推測ができるのでカンボジアの道路整備対策にも注目していきたいと新たな発見がありました。また他の面で学んだのが現地の人たちはトゥクトゥクという乗り物をタクシーのように使って観光客からお金を報酬としてもらっていますが彼らは絶対に大目に徴収、またはぼったくりを必ずしてきました。GRAB というアプリを使って相場を確認してもそれよりも絶対おおめにくれと言ってきます。だからそのあとはアプリをつかって最初に交渉してから運んでもらうことにしました。携帯のアプリのような技術革新が両者を公平にできることを感じ、新たに興味が湧くものを見つけました。そのようなアプリの開発は世の中を便利にし、お金も稼げますが同時に副作用もあるのではないかと思うのでそちらも研究、開発していきたいと思いました。ぼったくりをうけても新たな発見があったのはとても良いことでした。

シェムリアップに移動した後、ベルトラという日本の観光会社が開催している“孤児院ツアー”というものに参加しました。こちらにくる前その“孤児院ツアー”について調べていましたが端的に説明すると、孤児院ツアーとは孤児院にカンボジアの孤児達をあつめそこをボランティアという名でツアーする客から資金を募るというビジネスの方法です。このツアーに参加した理由として続々と孤児を集めビジネスをするこの会社ですがもし劣悪な環境で孤児達が利用されビジネスが成り立っているとしたらそこには道徳的な問題があると思いい、実際に訪れて孤児達が育つ環境をこの目で見てやろうと思ったからです。また孤児は何

歳にここをでて、その後どのような人生を歩むことができるのか、この会社がもしこの経営で支援をするなら今後の孤児の人生のサポートができているのかを調べたかったからです。ホテルでのピックアップで孤児院につくと、たくさんの子供達、古びた施設、カンボジア人の英語が少し話せる管理者がおり、自分はイスが用意されてあとは放置されたような状況でした。孤児院はそこまで悪くはない施設であり生活するには十分でした。しかし午後の16時くらいになると次々と子供達の母親が迎えにきました。最初はということかと思いましたが、その子達は孤児ではなく、ビジネスのために集められた偽孤児でした。ビジネスのために子供を集めているこの光景をみて完全に子供を利用しツアー客を募るこの会社に腹が立ちました。中には少数、孤児の子供もいましたが慣れていいのかあまり悲しそうではありませんでした。私は将来NPOを設立したいと考えてしますがこの活動を通して、支援するひと、支援されるひと、それを仲介するNPOはひとつつながりで対等な関係であることが大事であると感じました。金だけではなく人それぞれの思いもくみとってあげることは金を稼ぐ以上に大切なのではと学ぶことができました。

3つめの支援活動はフィリピンのセブ島で行いました。海の上で生活を強いられるバジャウ族たちに何かできることはないか、NPOを設立する上でのテーマ探しのためにバジャウ族の村を訪れました。日本で作成した質問表にはバジャウ族の現状や困っていることなど、ぶつける質問をターゲットをしばり作成しました。まずメインの質問であるバジャウ族はなぜ海上で生活を強いられているのかという質問です。ネット上には彼らは魚などを獲って生活しているため陸上で生活するとなると漁業ができなくなり、結果として生きていくことができなくなるという情報がありました、こちらに来る前の事前指導時にバジャウ族が土地に住めない理由として土地の所有権がないという推測がありましたが土地の所有権がないというわけではないそうです。実際に松田さんやバジャウ族のその仲間に聞いてみると、バジャウ族は現地のフィリピン人から迫害を受けており、"別の人"というふうに扱われているそうです。バジャウ族は昔から海で暮らしていたため、現地のフィリピン人からはそういう概念が離れないとのことでした。陸の方に家を所有する必要がなく、また住みたくもないとのことでした。私はバジャウ族がもっと暮らしやすいように陸での生活をサポートできるような案を考えに訪れましたが彼らは今の生活に満足しており差別問題が関係しているのを初めて知りました。NPO設立の支援ターゲットをバジャウ族にしようとしていましたがそれはやめることにしました。しかしNPO設立のテーマを見失ったわけではありませんでした。この研修のカンボジア、プノンペンに訪れたとき、たまたまカフェで日本人と話す機会があり、話を聞くと「日本の大学生の集団で自分のバイト代をそこらへんにいる家がない子供たちの家を作るのにあてて支援している」というのを聞きました。私も実際ホームレスで1人である子供を見ましたし、物乞いをして生活しており支援が必要なのは明らかでした。ここカンボジアで家を作る以上の拡大支援をすることも可能だと思い(教育や食料)テーマの1つにできると思いました。

私はこの 2 カ国 3 つの活動を通じて、影でとても危ない作業をし人々の生活を支える光景を見れたこと。また濁りのない支援をしたいという思いがテーマを見つけたとともに自分が NPO を設立してやるというモチベーションにつながったこと。とても貴重な経験で自分の人生に深く影響しました。アクティブスチューデント応援奨学金に深く感謝します。



(地雷除去現場へ行く途中の写真)



(バジャウ族の人たちと)



(カンボジアの孤児院の子供達)